UNVEILLING 'RARE' USAGES IN THE HISTORY OF ENGLISH
（英語の歴史における「稀有な」語法の隠れた真実）

中村不二夫

要旨

筆者は、37 年間一貫して、1500 年－1900 年に書かれた出版を意図されていない個人の日記と私的な書簡史料を分析し、文法、形態、語彙の歴史を正すことを研究課題としてきた。これらの史料は、次の点で重要だからである。

(i) 言語変化の最前線を知る
(ii) 消滅したはずの語法が存続しているかどうかを探求する
(iii) 語法の時代的欠落を補う
(iv) 未知または稀有な語法を発掘する
(v) 語法に対する当時の生の証言を収集する

本論文は、とりわけ国際英語史会議、後期近代英語に関する国際会議、ヨーロッパ言語学会、ポーランド言語学会、ヘルシンキ大学ゲストレクチャー、名古屋大学 21 世紀 COE プログラム国際会議招待発表、近代英語協会における発表、およびその公刊論考の中から (iv) に関連する研究を選りだし、稀有であると信じられてきた語法の中には、実際には稀有とはいえない語法があることを示そうとした論文である。

第 1 章は、上記 (i)～(v) の概説である。未踏の日記･書簡史料を分析すれば、21 世紀初期の今日においてさえ、主として文学作品の言語研究に依拠してきた従来の研究を補完する形で史実の修正に貢献できることが実証されている。
まず、(i) に関し (1.2.1 節)、語句レベルでは、最古の例よりも 2 世紀以上古い分詞形容詞 lowering 等が発見されている。文法レベルでは、否定平叙文において need to-不定詞が助動詞 do と共起する構造が定説よりも 2 世紀古く使われている事実、be being PP 型受動進行形の確立は、定説の 1900 年頃ではなく 1820-1850 年であることなどが報告されている。日常言語レベルでは、文学言語よりも言語変化が早く生じていたことが実証されている。次に、(ii) に関し (1.2.2 節)、14 世紀末にしか用例が確認されていない be busy to-不定詞の構造が 17 世紀中頃過ぎの日記に数多く使われている点等が報告されている。(iii) の例としては (1.2.3 節)、be busy (in) Verb-ing 構造、本動詞 have の進行形が取り上げ

られ、日記・書簡史料は先行研究における用例の著しい時代的間隙を埋めることに貢献できることが示されている。さらに、(iv) には (1.2.4 節)、擬似助動詞 be coming to-不定詞、3 人称単数主語に呼応する助動詞 don't (以下、3SG don't)、a drunken boy was carrying by our constable のような、有生名詞主語に続く能動受動進行形、分詞の進行形 being going、「～のふりをする」を意味する seem、否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法が含まれることが触れられた後、これまでその使用が 1 例しか報告されていない擬似助動詞 be coming to-不定詞の語法が、調査史料に 6 例確認されたことが示されている。最後に、(v) に関係し (1.2.5 節)、日記や書簡が、書かれた当時の語法に対する書き手の生の証言を収集するのに格好の史料となり得ることが例証されている。たとえば、複数形 kine と cows に関し、19 世紀後半のイングランドとウェールズの辺境では、今や古語法となった kine の使用が世代を識別する語法となっていたという F. Kilvert の証言、オックスフォード大学で神学博士の学位を取得した W. B. Stevens が、なぜ will not の縮約形は、can't (<can + not), shan't (<shall + not) のように win't にならないかいぶかしく思う心情を日記に吐露している点等が紹介されている。

第 2 章から第 6 章には、1.2.4 節において指摘だけに止められていた語法が詳述されている。

まず、第 2 章において、3SG don't の語法が、いつ頃どのような過程を経て he doesn't know へ移行したかが詳らかにされる。先行研究には、古い英語では he don't know が許されていたという断片的な言及が散見される程度である。論証方法として、まず、主要な 15 の助動詞の否定辞縮約形の初出年と確立期とが示され、don't は 1615/1625 年頃に出現し 17 世紀後半に確立したのに対し、doesn't は 1674 年に初出が確認されるものの一般化するのは 19 世紀半ば以降である点が明らかにされる。当然の予測として、doesn't が使えない以上 don't がその代役を果たしていたと考えられるが、まさにそれが歴史的事実であったことが統計によって示されている。結論は次のとおりである。書かれた史料に関する限り、3SG don't は、19 世紀後半の 50 年間に doesn't に取って代わられた。それまでは、vulgar ではない英語においてさえ普通に用いられ、教育を受けた書き手も使った。この構造は、主語は人称代名詞が多く、文の種類は平叙文に偏っている。19 世紀中頃に doesn't が一般化するに伴い、3SG don't は俗語レベルの語法として烙印を押され始め、20 世紀初頭には非標準の、あるいは会話調の語法として活路を見い出した。一方アメリカ英語では、20 世紀後半にようやく doesn't が一

般化した。主要な移住の時期には、元のイギリス英語で doesn't が使われることはまだ稀だったためであると考えられる。

次に、第 3 章では、有性の主語が先行する能動受動進行形の歴史が扱われている。受動進行形が登場するまでは能動受動進行形が主要な表現であった以上、もしも [+Animate] あるいは [+Human] の主語が許されないとしたら、不便だったはずである。この仮説を出発点に用例収集が行われた結果、1600 年頃から受動進行形が確立する 1820 年－1850 年頃にかけて、先行研究によって発見されているよりも多くの書き手によってこの語法が使用されていたこと、教育を受けた書き手によっても使用されていたこと、さまざまな動詞が使われていたことが明らかとなった。本構造は必ずしも稀有であるとはいえない。

第 4 章には、現在分詞の進行形の歴史が詳らかにされている。中英語に登場したとされるこの語法は、先行研究にあっては、二重の ing 形のぎこちなさのために、英語の歴史の中で極めて稀であったと考えられている。しかしながら、主に進行中の動作、取り決めや計画をあらわすために、17 世紀－19 世紀日記・書簡史料で使われ続けたことが明らかにされている。

さらに、第 5 章は、「～のふりをする」の意味をあらわす動詞 seem の歴史が解明されている。きっかけは、OED の seem の第一次派生語 seemer, seeming と第二次派生語 seemingly, seemingness は「ふりをする」という概念を有する一方で、なぜ基体である seem にはないのかという素朴な疑問であった。派生語がこの概念を新たに獲得したとは考えがたい。これは、OED の編者が見落とした可能性が高い。seem のこの用法は、W. Shakespeare の劇作品に 7 例、19 世紀末の Man 島の方言に 1 例確認されている。この事実は、近代英語期の存続の可能性を示唆している。実際、調査により、その存続は紛れもない事実であった。用例の書き手は S. Pepys が突出しているが、第 4 代 Chesterfield 伯爵、既出の Rev. W. B. Stevens も使用している。この語法は 17 世紀－18 世紀の文法の一部だった可能性がある。本章は、seem の派生語が「ふりをする」の遺伝子を有する謎を解くだけでなく、アメリカ英語に本用法が存続している事実をも説明する。Elizabeth 朝時代に使われていたこの語法が新大陸に持ち込まれたと考えられる。

最後に、第 6 章は、否定辞 not が後続する現在分詞・動名詞の語法 (以下、not 後置構造) の歴史が扱われている。この語法は、現代においても歴史的にも稀であるといわれているが、日記・書簡史料 130 冊、10 種類の電子コーパス、OED[2]

on CD-ROM の分析の結果、この構造は決して稀有ではなかったことが判明した。要点は次のとおりである。not 後置構造は、特に 16 世紀中頃から 18 世紀中頃にかけて文法の一部だった可能性が高い。ing 形の動詞性の強さに比例して not 後置構造の頻度が高かった点、Verb-ing + not に典型的に使われた動詞は否定平叙文において助動詞 do に根強く抵抗した動詞だった点に鑑みて、not 後置構造は否定平叙文における否定の様式が反映された構造であると考えられる。使用者と用例の出典の吟味から、not 後置構造は、王侯貴族や高い教育を受けた人物を含む広範な人々によって、ブリテン島においてもアイルランドにおいても、公式か非公式かにかかわらず、さまざまな文書において使われた。英文法の歴史を根底から覆す発見ではないにしても、現在分詞と動名詞の否定の歴史は再考する必要がある。

以上のように、5 つの事例研究を通し、稀有な語法であると信じられてきた語法が実際には稀であるとはいえないことが指摘されている。英語史研究においては、文学テキストと同様に非文学テキストも分析する必要がある。理論研究を相補うものとしても伝統的史的研究は不可欠である。埋もれた史実を発掘することは、歴史言語学(者)の最も重要な任務の一つである。言語変化の説明は、共時的データの徹底的な分析が大前提だからである。大量の文献が、今もわれわれの分析を待ち侘びている。本稿における発見が英語史実の訂正となり、英語史研究に一石を投じることができれば幸いである。